

直前京大国語総合演習

【2回目】



【問題】

【一】 出典…梶井基次郎『路上』／ オリジナル問題

文章略解

友人宅まで近道できるE停留所を発見して喜んでいた。ある日、友人とE停留所に行く時にいつもの道ではなく崖を登って近道をした。その道が田舎道だったので、いつもの市の中に行くとは思えないような旅情を感じた。またある雨上がりの日、学校の帰りに崖の近道を歩いたとき、道がぬかるんで危ないと思ったが、そのまま下りていった。ぬかるんだ道をあえて滑り下りてやろうと思って、滑り下りた。周りを見たら、誰も見ていなかった。誰かが見ていてくれたらと思い、淋しい気持ちになった。そして、滑ったことを書かねばならない気持ちと小説を書くことによって自己を語らないではいけないという気持ちが生じた。

解答

問1 普段使っていた道を抜け、崖からの近道を通ってみると、到着点である駅までの道筋が旅情を感じさせるほど意外性に富んだものであることに気づき、思いがけない収穫を得たような気持ちで、その後頻繁にその道を通うことになったということ。

〔11字・解答例〕

問2 雨あがりの傾斜を滑り落ちながら、いつしか背中まで地面につけるという大仰な格好と、起き上がろうと必死になっていた自分の姿を、だれか第三者に見られ、滑稽な芸当として嘲笑されているのではないかと危惧する気持ち。〔102字・解答例〕

問3 (2)の「見た」は、滑稽な姿を他者に見られたのではないかと心配する羞恥心から辺りを見廻し「他者が見ていないことを確認するため」のものであったが、(3)の「見た」は、自力でもどうすることもできないまま身の危険を覚えた重大な事態が完了した後、再び変哲のない日常に回帰したという束の間の出来事を、自身でさえ信じきれなかったため、せめて「一連の出来事を見てくれた証人の存在を願って」辺りを確認する気持ち。〔195字・解答例〕

問4 予想もしない危機に遭遇し、この上ない緊迫を伴う体験を実感として抱きながらも、自身では夢か現実かの判断も出来なかったことから、日常性のなかで確立された自己の意識がいかに不確定であるか、また自身を取り巻く世界が、いかにもろく危ういものであるかを悟ったということ。〔29字・解答例〕

問5 何気ない日常の中に起こった非日常の事態に対して、誰も目撃者はおらず、また自身でさえも確信を持てない状態だったが、崖を滑り落ちた二連の出来事が、確かに事実であったことを、鞆に入り込んだ泥の固まりが唯一証明していたということ。

〔11字・解答例〕

解説

問1 入試の小説では、「登場人物の心理をくわしく説明する」というのが、どの答案にも必要な発想であり、本文を読んで何となくはわかっているはずの登場人物の気持ちに「正確に具体的に説明する」能力が試されている。難しいことが問われているのではないが、具体的な情報を的確にまとめ、表現するのはなかなか難しい。

この設問では「どういうことか」と問われているから、「傍線部をくわしく言い換える」問題である。「その日」の説明として、「友人と崖からの近道を通った」こと、「他国を歩いているような変な気持ち」旅情を感じた」ことをまとめる。「また：通ふやうになつた」の説明として、「(崖からは通っていないが) Eからの道をそれまでも通っていた」ことに加えて、今までにない「新鮮な気分」で通うようになったことを説明したい。「獲物」の言い換えとして「思いがけない(心理的な)収穫」であったことを表現する。ポイントをまとめた結果として、自分の答案が「傍線部の言い換え」になっているかどうかをチェックしよう。

問2 「誰かが何処かで見てゐやしなかつたか」という主人公の気持ちを具体的に(明確に)言いなおす。直後の「それらの人家から見れば、自分は高みの舞台で一人滑稽な芸当を一生懸命やつてゐるやうに見えるにちがひなかつた」という部分は、「自己羞恥」といった気持ちとして説明できるから、これとつなげると傍線部は「見られていやしくないかという心配・不安」という方向性の説明になるはず。問3との対比も踏まえて「見られたくない」という方向で説明しよう。

また、解答欄の大きな京大国語では、単に傍線部を説明するだけではなく、ある程度の範囲をまとめる、という発想が必要。こ

の設問では、34～43行目の状況のまとめを簡潔に表現したい。「雨あがりの傾斜を下りる」「滑って転び、起き上がる」という内容と、直前の「何時の間にか本気になつてゐた」という心理を答案に反映させたい。

「雨あがりの傾斜を下りようとして滑って転び、起き上がろうと悪戦苦闘する自分自身を格好悪いと思い、誰かに見られなかったかと心配する気持ち。〔67字〕」というようなまとめ方でもよい。

これも、難しいことは問われていないが、本文をきちんと説明しきるには、それなりの練習を重ねる必要がある。過去問演習をきちんと行っておこう。

問3

直後に「嘲笑つてゐてもいい、誰かが自分の今為たことを見てゐて呉れたらと思つた」とあるから、「見ていてほしい」という方向性で説明する。逆に傍線(2)での心情は「見られたくない気持ち」という方向でまとめればよい。問2でくわしく説明しているから、傍線(2)の心情の説明は簡潔に行う。

傍線(3)での心情は、近くの心情語をあつてみると、けっこう複雑である。56行目までの「飛び下りる心構へ」「その緊張」の説明。それを「弛めた」の説明。54行目の「なにかが止めてくれたといふ感じ」の説明。57行目「きよんとした」＝「あつけない気がした」の説明。60行目「一瞬間前の鋭い心構へ（＝緊張・覚悟）が悲しいものに思ひ返せるのであつた」の説明。少し後ろの箇所になるが、68・69行目の、「誰か見てはゐなかつたかしらと二度目にあたりを見廻したときの廓寥とした淋しさ（＝「悲しいもの」）」も答案に反映させたい。

以上をまとめて、例えば、〈(2)では見られたくないという羞恥心や見られたのではないかという心配があつたが、(3)では、崖から落ちる危険に緊張したものの自分を超えた力に止めてもらつた気がして、緊張を緩めつつ、今起こったことが信じられないのでこの劇的な出来事を誰かに見ていてほしかったという物足りなさや寂しさがある。〔139字〕〉というような答案でもよいだろう。「登場人物の心理をくわしく説明する」という基本方針を忘れないように。

問4

まずは、傍線部の言い換えを考える。「自分、自分の意識」「世界」が、「焦点を外れる」というのは、自分できちんと認識・把握できないということだろう。「泳ぎ出して行く」というのは、勝手に暴走してしまう、ということ。具体的には、61行目に書かれている「魅せられたやうに滑つて来た」という行動を指す。

設問が、「どういうことか、またなぜこのような気持ちに捕らえられたのか」となっているから、この問い方に答えるためには、「なぜ↓自分でも信じられない滑ってきたという行動をとった（具体的な行動に対する具体的な気持ち）」「どういうこと↓自分、自分の意識、世界は（一般的に）把握・制御できないと思った」というように、〈具体↓抽象・一般〉という流れで説明するとうまくまとまる。

例えば「崖に魅せられて滑って来た自分自身を、興奮しつつ信じられない思いで振り返ると、そこに破滅にもつながるような通常の意識ではとらえられない連鎖があったのを感じ、周囲の状況やそれに対する自分の反応が、時と場合によっては通常の理性からははずれたものとなり自分では制御できなくなるものなのだ、と感じている。」〔147字〕などのまとめ方も可能だ。

問2、問3、問4もそうだが、「本文のどこからどこまでをまとめるのか」という「範囲」を意識することが、解答欄の大きな京大型の答案づくりでは大切である。繰り返し注意しておく。

問5 入試の小説で、「どういうことか」という設問が何を答えさせようとしているのかを理解しておかないと、何を答えてよいかわからないだろう。形式的には「傍線部の言い換え」をしつつ、要は、「登場人物の気持ちをくわしく説明する」ということ。（他の過去問も、そういう目で見直してみよう。）

また、小説の場合、答案に書くのは「本文から論理的・常識的に類推できる心理の説明」であって、「唯一絶対的に正しい説明」ではない。つまり、本文のコトバとつじつまの合うような「仮説」を書くのであって、「正解」を書くのではない。だから、今回のような、本文に書かれていないような気持ちは、思いきって「仮説」を立てる勇気が大切。ただし、あくまでも「本文のコトバとつながる説明」をしなければならぬから、「想像」を書くでもない。結局、問1～問4までの答案で、まだ説明していない70行目～75行目という範囲を、「傍線部の言い換え」になるように「仮説」を立てながら説明する、ということになる。

【配点の目安】 50点 問1 8点 問2 9点 問3 12点 問4 12点 問5 9点

問1

〈ア普段使っていた道を抜け、イ崖からの近道を通ってみると、ウ到着点である駅までの道筋が旅情を感じさせるほど意外性に富んだ

ものであることに気づき、工思いがけない収穫を得たような心持ちで、オその後頻繁にその道を通うことになったということ。〈

…8点

※ア1点 イ2点 ウ2点 エ2点 オ1点

*アは、「普段から使っていた近道を通った」ことを示せば可

*イは、「崖からの近道を通った」ことを示せば可

*ウは、イに「旅情を感じた」ことに言及すれば可

*エは、「獲物」の意味を説明すれば可

*オは、「その後その道を通うことになった」と示せば可

問2

〈ア雨あがりの傾斜を イ滑り落ちながら、いつしか背中まで地面につけるといいう大仰な格好と、起き上がろうと ウ必死になつて自分の姿を、エだれか第三者に見られ、滑稽な芸当として嘲笑されているのではないかと オ危惧する気持ち。〉…9点

※ア1点 イ2点 ウ2点 エ2点 オ2点

*アは、「雨あがりの傾斜」を下りようとしたことを示せば可

*イは、「滑って転び、起き上がろうとする」と主人公の行動を説明すれば可

*ウは、「本気になっている」と主人公の心理に言及すれば可

*エは、第三者にどのように見られているかと思っているのかを説明すれば可

*オは、「心配・不安」という主人公の気持ちを示せば可

問3

〈(2)の「見た」は、ア滑稽な姿を他者に見られたのではないかと心配する羞恥心から イ辺りを見廻し「他者が見ていないことを確認するため」のものでしたが、(3)の「見た」は、ウ自力でもどうすることもできないまま身の危険を覚えた重大な事態が完了した後、工再び変哲のない日常に回帰したという束の間の出来事を、オ自身でさえ信じきれなかったため、カせめて「一連の出来事を見ていて

くれた証人の存在を願って」辺りを確認する気持ち。〕：12点

※ア 2点 イ 2点 ウ 2点 エ 2点 オ 2点 カ 2点

*アは、(2)の「見た」では「羞恥心・心配」という気持ちが根底にあることを示せば可

*イは、(2)の「見た」が「他者に見られたくない」気持ちによるものと示せば可

*ウは、(3)の「見た」が「崖から落ちる危険を、自分を越えた力で止めてもらった」後のことと説明すれば可

*エは、(3)の「見た」がウの後に「再び日常に戻った時のこと」とであると示せば可

*オは、ウが「自分では信じられない」ことに言及すれば可

*カは、(3)の「見た」が「誰かに見てもらいたい」気持ちによるものと説明すれば可

問 4

〈ア予想もしない危機に遭遇し、この上ない緊迫を伴う体験を イ実感として抱きながらも、自身では夢か現実かの判断も出来なかったことから、ウ日常性のなかで確立された自己の意識がいかに不確定であるか、エまた自身を取り巻く世界が、いかにもろく危ういものであるかを悟ったということ。〉：12点

※ア 3点 イ 3点 ウ 3点 エ 3点

*アは、「崖を魅せられたように滑ってきた」という主人公の体験を説明すれば可

*イは、アの行動を「実感として感じながらも夢か現実かの判断がつかない」という主人公の気持ちを説明すれば可

*ウは、主人公が「自分の意識を把握できない」ことを示せば可

*エは、主人公が「自分を取り巻く世界を把握、制御できない」ことを説明すれば可

問 5

〈ア何気ない日常の中に起こった非日常の事態に対して、イ誰も目撃者はおらず、ウまた自身でさえも確信を持ってない状態だったが、エ崖を滑り落ちた一連の出来事が、オ確かに事実であったことを、カに入り込んだ泥の固まりが唯一証明していたということ。〉

…9点

※ア2点 イ1点 ウ2点 エ2点 オ2点

*アは、出来事が「日常の中の非日常であった」ことを説明すれば可

*イは、「誰も目撃者はいなかった」出来事であったことを示せば可

*ウは、「自分でも信じられない出来事だった」ことを示せば可

*エは、アを「崖を滑り落ちた一連の出来事」と具体的に説明すれば可

*オは、「鞆に入り込んだ泥の固まりが（この体験が）事実であったことを証明していた」ことを示せば可

〔二〕 出典…〔甲〕藤原（京極）為兼『為兼卿和歌抄』（岩波古典体系『歌論集・能楽論集』所収）・〔乙〕『古今和歌集』仮名序古注・〔丙〕藤原俊成『古来風体抄』（小学館古典全集『歌論集』所収）／オリジナル問題

現代語訳

〔甲〕 それ相応の身分の人々が集まっている（和歌の）会で、（ある）殿上人が、

浅香山……元は采女であり、今は人妻となった私が、あなたに自分の姿までさらしているのですから、浅香山の姿まで映って見える山のように、浅はかでおろそかな気持ちで、あなたのことを思っているはずがありませんか。私はあなたのことを心から大切に思っているのです。

といった歌を話題に出して、「（この歌は）歌の父母（にも喩えられるほどの秀歌）」といわれる歌で（あり）、（表現内容を的確に言語化するにあたって）無用な言葉などまさかあるはずはないと思うが、『影見ゆる山の井』であるならば納得がいきますが、『さへ』という語は、どう考えても（どんな）意味が込められているのか、よくわからない」ということを申しましたところ、（その場にいた）和歌に見識のある人々も、「本当にこのように「『影さへ』」と云っては理解しがたい」といって（その会が）終わったのだが、（この歌を解釈する際に、）あの采女がこの『浅香山』の歌を詠んだ心情は、どうして起こり、どのように詠めばよい（と思った）所から出来上がった（歌な）のかと、（もともとこの歌の）出所を確認せずに、「山の井」と言うと、（現実には）それを目の当たりにして詠んでいるかのように理解して（いるから）、疑義が解決しないのではないか。（かつて采女であった女が今は）人妻であって、他人に（直接姿を見せて）会ってよい身ではないのに、（来客の王が）客に対する接待がいい加減だと言って非難したので、夫の言葉に従って、その王をなだめようとして（接客に）姿を見せた身であるので、盃を持つてでも、この王をなだめようと思う気持ちで、「見せてはならないはずの自分の姿までも、（王に）お見せ申し上げるのは、（王のことを）浅はかでもいい加減には思っていないからです」と言うために持ち出して来た「山の井」なのだから、（表現素材としての）言葉に持ち出したわけでございますのに、（ただ）そのまま「山の井」と言っているからということ、この「さへ」を「山の井」と密接に関わらせて見るとするならば、確かに理解できないはずだ。（采女）自身の姿に結びつけて見れば、理解できないはずはない。この程度のことさえ、認識せずに、（歌を頭の中だけで）考えて読んでいるとすれば、（先の人々にとっては）この程度（の理解）であるに違いなからう。

〔乙〕（帝が）葛城王を東北地方へ派遣した時に、（王は）「国司は、やる事がいい加減だ」と言って、（国司が王を歓待する）宴会など

催したけれど、(王は)不興な様子だったので、(国司の許にいた元は)采女であった女が、盃を手には詠んだのである。これ(「采女の詠んだ歌」)によって、王の気持ちも和らいでしまった。

浅香山……元は采女であり、今は人妻となった私が、あなたに自分の姿までさらしているのですから、浅香山の姿まで映って見える山の泉のように、浅はかでおそろかな気持ちで、あなたのことを思っているはずがありませんか。私はあなたのことを心から大切に思っているのです。

〔丙〕『大和物語』にも「昔、大納言であった人が、帝に差し上げようと思って大切に育てていた娘を、内舎人であった者が見て、(娘に対する恋心がつのり)他のことは何も考えられなくなったので、だしぬけに(娘を)略奪して、東北地方に去ってしまった。(内舎人と娘は夫婦となり)安積郡の安積山に質素な住まいを作って暮らしていた時に、(内舎人の妻となった大納言の娘がある事で)外出して、山の泉で(自分の)姿を見ると、(眉も生え、お齒黒も取れて)以前とは全く違ってなるようになってしまった(自分の)容姿を見るのも気が引けて、(次のような歌を)詠んで木に書き付けて、亡くなってしまったという」ということで記されている(歌は)、安積山……浅いだけではなく、安積山の姿までが映って見える山の泉のように、浅い気持ちで夫であるあなたのことを愛していたはずがありません(「深くあなたを愛しておりました」)。

この歌などと言うまでもなく、『万葉集』の中でも重要な歌であり、『古今和歌集』でも、歌の父母(のように優れた歌)として、(その)序文にも提示している歌であるが、『大和物語』にはこのように記されている。

解答

問1 (1) 「浅香山」の歌の「さへ」という助詞の意味が理解できないという人たちは、もともとの歌の出所を確認せずに、「山の井」と言う、現実にはそれを目の当たりにして詠んでいるかのように理解して、疑義が解決しないのではないだろうか。

〔108字・解答例〕

(2) 朝廷から派遣された葛城王は「国司は、やる事がいい加減だ」と言っ、国司が王を歓待する宴会など催したけれど、不興な様子だったので〔63字・解答例〕

(3) 内舎人の妻となった大納言の娘が外出して、山の泉でそこに映った自分の姿を見ると、眉も生え、お齒黒も取れて、以前とは全く違ってなるようになってしまった自分の容姿を見るのも気が引けて〔88字・解答例〕

問2 優れた作として高い評価の定まっている歌には、表現内容を言語化するにあたって、不要な語などまさか含まれているはずはないということ。〔64字・解答例〕

問3 「浅香山」の歌の「さへ」という助詞が理解できないと言っている歌人達について、それは、「浅香山」の歌が詠まれた元の状況を調べもせずに、単に現実の風景を前にして詠んだものと誤解しているから、そのような誤読を犯すのであり、歌人として拙い態度だといっている。〔125字・解答例〕

問4 内舎人に略奪されてその妻となった大納言の娘の、夫婦になった事情はどうであれ、今は夫のことを深く愛しているという思い。

〔58字・解答例〕

問5 元は采女であり、今は人妻となった私が、あなたに自分の姿までさらしているのですから、浅香山の姿まで映って見えている山の泉のように、浅はかでおろそかな気持ちで、あなたのことを思っているはずがありませんか。私はあなたのことを心から大切に思っているのです。〔125字・解答例〕

解説

問1 京大古文の現代語訳の原則を確認しておく。

- 1 主語・目的語等を補う。会話文の場合、話し手は「私」、相手は「あなた」といった形でよい。
- 2 指示語があればその内容を補う。
- 3 対比的表現があれば、対比されている内容を簡潔に補う。
- 4 原因・理由を明示しなければ完結した内容にならない場合は、それを補う。

原則は以上である。後は設問に特に指示のある時はそれに従う。

傍線(1) この「源」は、和歌の詠まれた事情についての情報を言う。「源にもとづき見」るとは、和歌の詠まれた状況について記されたものを見る、ということ。「山の井といへばそれに向きて」の「それ」は「山の井」。「源に〈心得て〉の主語は、本文

中に指摘すれば「面々の才学の人々」であるが、それがどういう人々であるかもよく考える。ここでは問題になっている「浅香山」の歌について、「さへ」という副助詞がどういう意味なのか理解できないと不審を表明する人々である。彼らの「不審」の理由を、筆者は「源にもとづき見ずして、山の井といへばそれに向きよめるやうに心得て」いるからだと言っているのである。そうした文脈理解に基づいて答案を作成する。

傍線(2) 「まうけ(設け)」は「準備」。「すさまじ」は「興ざめだ・殺風景に感じる」。以上は重要基本古語。次に「国の司、事おろそかなり」が葛城王の言葉であることをつかむ。それは〔甲〕に「まうけおろそかなるとてとがむれば」とあることから判断できる。「まうけなどしたりけれど」の主語は国司。「すさまじかりければ」は葛城王の様子を言う。

傍線(3) 傍線部全体の主語は、内舎人に掠奪され結局その妻となった大納言の娘。「山の井」の「井」は清水の湧き出る泉。「影」は「山の井」の水面に映った女の姿。「ありしにもあらず」とは、自分の姿が以前と全く違ってしまったこと。但し、容姿が衰えたのではない。平安貴族女性は成人すると眉を抜き、鉄漿かねを施すのが普通であった。鉄漿とは、酸化した鉄片で歯を黒く染めること。内舎人に掠奪された大納言の娘は、鏡や化粧道具もなく、顔の手入れもできずにいたのである。だから、泉に映った顔は、眉が生え鉄漿もすっかり剥げ落ちていた。夫の目にそんな自分の醜い容姿をさらしていたと気づいた女は、恥ずかしさに堪えられず、歌を残して悶死する。正確な現代語訳のためには、そうした古文常識も必須である。

問2 形容動詞「いたづらなり(徒なり)」は「無駄だ・虚しい」という意味。だから「いたづら詞」とは「無駄な語」。ここでは、表現すべき内容と関わりのない不要な語句ということ。「よも…じ」は「まさか…ないだろう」。ここは「歌の父母といふほどの歌」について言われている。「歌の父母といふほどの歌」とは、優れた歌として高く評価され、模範となるような歌。そうした文脈を押さえて説明する。

問3 まずは傍線部を含む文を正しく解釈すること。「かやうの事をだに見わかずして、思ひ見たらむは、かくのみぞあるべき」の「かやうの事」とは、「浅香山…」の歌が詠まれたもとの具体的状況を指す。「かくのみぞあるべき」とは、多くの力ある歌人たちでも「浅香山…」の歌に使われた助詞「さへ」の意味が理解できずにいるということを言う。これだけのことを把握しまとめれば、設問の要求する「誰についてどうである」の説明は一応できたということになる。ただここにはさらに、筆者のそうした誤りを犯

す歌人たちに対する批判が込められていることにも留意すべきだ。とすれば、そうした筆者の批判的な心情も答案に含めてこそ完全解答といえるのである。緻密な読解とはどういうことか、肝に銘じてほしい。

問4

傍線部の現代語訳は、「浅い気持ちで夫であるあなたのことを愛していたはずがありません」となり、大納言の娘の夫に対する深い愛情の告白である。しかもそれは、醜い自分の容姿を夫にさらしていたことを恥じて絶命する娘の、この世で最後の夫への告白なのである。『大和物語』は平安前半期の成立であるが、この時代の物語には、登場人物の細かな心情の流れなど説明されない。しかし和歌には心情が凝縮される。「どうしてあなたへの愛情がいかげんであるはずがありません」と夫に告白して世を去る女の心情を、淡々と記される事実の描写から読み取らねばならない。とすれば着眼点は、二人の出会いの突飛さ以外にない。大納言の娘は内舎人に掠奪されて妻になったのであった。しかし今はそんな過去などに関わりなく夫を深く愛している、女はそう告白しているのである。文脈から読み取りうる女の思いは他にはない。

問5

設問に「〔甲〕〔乙〕の内容に即して」とあるが、とりわけ重要なのは〔甲〕である。〔乙〕の内容は〔甲〕に含まれ、〔甲〕の方がより詳細な説明がなされている。そしてポイントは「さへ」の解釈である。ところで一般的な和歌の修辭法からすると、「浅香山影さへ見ゆる山の井の」は「浅く」を導く序詞と考えられ、末尾の助詞「の」は「::のよう」に」という意味の比喩の用法である。その序詞のなかの「影さへ」を、〔甲〕の筆者が兼は、「見ゆべくもなきわが影をさへ見え奉る」と解釈すべきだと言っている。「見ゆべくもなきわが影」は、それ以前の本文に「人の妻にて、人に見ゆべき身にもあらねど」とあることから、今は人妻であるかつての采女が、本来他人の目にさらすべきではない自分の姿まで葛城王にさらすことを言っていると判断できる。「浅香山影さへ見ゆる山の井の」が「浅く」を導く序詞であると同時に、その「影さへ」の個所には、采女の恥も省みないで自分の姿を他人にさらすという実質的な心情も込められているというのが為兼の解釈である。その采女の行為は、大切な客である葛城王を接待しようとする切実な思いから出たものであることは言うまでもない。以上のポイントを押さえて答案を作成する。

【配点の目安】 50点 問1 各5点×3＝15点 問2 8点 問3 10点 問4 7点 問5 10点

問
1

(1) 〈ア「浅香山」の歌の「さへ」という助詞の意味が理解できないという人たちは、イももとの歌の出所を確認せずに、ウ「山の井」と言うと、エ現実に関目を目の当たりにして詠んでいるかのように理解して、オ疑義が解決しないのではないだろうか。〉…5点

※ア1点 イ1点 ウ1点 エ1点 オ1点

*アは、主語を「『浅香山』の歌の『さへ』という助詞の意味が理解できないという人たちは」と補えば可

*イは、「ももとの歌の出所を確認せずに」と〈源にもとづき見ずして〉を訳せば可

*ウは、「『山の井』と言うと」と〈山の井といへば〉を訳せば可

*エは、「実際にそれ（山の井）を目の当たりにして詠んでいるかのように理解して」と〈それに向きよめるやうに心得て〉を訳せば可

*オは、「疑義が解決しないのではないだろうか」と〈不審ひらけぬにや〉を訳せば可

(2) 〈ア朝廷から派遣された葛城主は、イ「国司は、やる事がいい加減だ」と言つて、ウ国司が、エ王を歓迎する宴会など催したけれど、オ不興な様子だったので〉…5点

※ア1点 イ1点 ウ1点 エ1点 オ1点

*アは、〈国の司、事おろそかなり〉と言つたのが「葛城主」であると補えば可

*イは、「国司はやる事がいい加減だと言つて」と〈国の司、事おろそかなり〉を訳せば可

*ウは、〈まうけなどした〉主語を「国司が」と補えば可

*エは、「宴会などを催したけれど」と〈まうけなどしたりけれど〉を訳せば可

*オは、葛城主が「不興な様子だったので」と〈すさまじかりければ〉を訳せば可

(3) 〈ア内舎人の妻となつた大納言の娘が外出して、イ山の泉でそこに映つた自分の姿を見ると、ウ眉も生え、お齒黒も取れて、エ以前とは全く違つてゐるやうになつてしまつた、オ自分の容姿を見るのも気が引けて〉…5点

※ア1点 イ1点 ウ1点 エ1点 オ1点

*アは、主語を「内舎人の妻となった大納言の娘が」と補えば可

*イは、「山の泉に映った自分の姿を見ると」と〈山の井に影を見るに〉を訳せば可

*ウは、「眉も生え、お齒黒も取れて」と〈ありしにもあらず〉を具体的に説明すれば可

*エは、「以前とは違ってしまった」と〈ありしにもあらずなりにける〉を訳せば可

*オは、「自分の姿を見るのも恥ずかしくて」と〈かたちを見るも恥づかしくて〉を訳せば可

問2

〈ア優れた作として高い評価の定まっている歌には、イ表現内容を言語化するにあたつて、ウ不要な語などエまさか含まれているはずはないということ。〉…8点

※ア2点 イ2点 ウ2点 エ2点

*アは、〈歌の父母といふほどの歌〉を説明すれば可

*イは、「表現の内容と関わりのない（語）」と〈いたづら〉を具体的に説明すれば可

*ウは、「無駄な語」と〈いたづら詞〉を説明すれば可

*エは、「まさかないだろう」と〈よもあらず〉を説明すれば可

問3

〈ア「浅香山」の歌の「さへ」と言う助詞が理解できないと言っている歌人達について、イそれは、「浅香山」の歌が詠まれた元の状況を調べもせずに、ウ単に現実の風景を前にして詠んだものと誤解しているから、エそのような誤読を犯すのであり、オ歌人として拙い態度だといっている。〉…10点

※ア3点 イ2点 ウ2点 エ2点 オ1点

*アは、〈誰について〉を『浅香山』の歌の『さへ』という助詞が理解できないと言っている歌人達について」と示せば可

*イは、「浅香山の歌が詠まれた元の状況を調べもしない」と〈かやうの事をだに見わかずして〉を具体的に説明すれば可

*ウは、「単に現実の風景を前にして詠んだものと誤解している」と〈思ひ見たらむ〉を具体的に説明して可

*工は、アの歌人達の捉え方は「誤りである」と示せば可

*才は、アの歌人達に対しての筆者の「批判的」な心情を示せば可

問4

〈ア内舎人に略奪されてその妻となった　イ大納言の娘の、ウ夫婦になった事情はどうであれ、エ今は夫のことを深く愛しているという思い。〉…7点

※ア2点　イ2点　ウ1点　エ2点

*アは、大納言の娘が「内舎人に略奪されてその妻となった」ことを示せば可

*イは、「大納言の娘」の思いであると示せば可

*ウは、「(略奪されたという)過去などに関わりなく」夫を愛していると示せば可

*エは、「夫を深く愛している」という思いを説明すれば可

問5

〈ア元は采女であり、今は人妻になった私が、イあなたに自分の姿までさらしているのですから、ウ浅香山の姿まで映って見えている山の泉のように、エ浅はかでおろそかな気持ちで、あなたのことを思っているはずがありませんか。オ私はあなたのことを心から大切に思っているのです。〉…10点

※ア2点　イ2点　ウ2点　エ2点　オ2点

*アは、「今は人妻であるかつての采女」が詠んだ歌であることを示せば可

*イは、「あなたに自分の姿までさらしているのだから」と〈影さへ〉に込められた心情を説明してあれば可

*ウは、「浅香山の姿まで映って見える山の泉のように」と〈浅香山影さへ見ゆる山の井の〉を解釈すれば可

*エは、「浅はかでおろそかな気持ちで、あなたのことを思っているはずがありませんか」と〈浅くは人を思ふものは〉を解釈すれば可

*オは、「私はあなたのことを心から大切に思っているのです」とこの歌により伝えたい気持ちに言及すれば可



会員番号	
------	--

氏 名	
-----	--